椎名麟三論

――その信仰と文学――

中野恵海

はしがき

椎名麟三は、昭和二二年、彼の三十六才の時「深夜の酒宴」を雑誌「展望」二月号に発表して、所謂戦後派作家としてスタートした。以来矢継早やに世に出された多量のその作品をながめてみると、質的におよそ次の三つに分けられる。即ちその一つは、本格小説と呼ばるべきもので「深夜の酒宴」「重き流れの中に」（昭・二二）「永遠なる序章」（昭・二三）「邂逅」（昭・二七）「美しき女」（昭・三〇）などがこれに属する。第二は、自伝的なものでそれには「赤い孤独者」（昭・二六）「自由の彼方で」（昭・二九）「神の道化師」（昭・三〇）「運河」（昭・三〇）等が挙げられ、第三のものには、即ち感想、随筆の類として「猫背の散歩」「私の聖書物語」（昭・三一）「愛と自由の肖像」（昭・三一）等がある。

作家椎名麟三を考える場合、ことに戦後派文学としての彼の位置とか、その独自性を理解するためには、終始彼の

本格物に注視すべきは勿論であるが、第二の自伝物は、その理解をたすける本人自筆の註釈として、又第三のものは更に、彼への人間理解を内面的に深めるものとして離すことの出来ぬものと考えられる。

本稿は、「深夜の酒宴」や「永遠なる序章」の様な、ひどく風変りな小説はどう理解すべきであるかという事を念頭に置きつつ、彼の文学の本質上で、最も重要なる要素と思われる彼のキリスト信仰を関連させてみたものである。気負った言い方をすれば、椎名文学の本質求明がその目的である。

一、彼のキリスト教信仰

椎名麟三は、昭和三一年一月から十二月まで「婦人公論」に「私の聖書物語」[1]を連載している。そしてこれが一番彼のキリスト信仰を見る上で便利であり、重要でもある。

「私の聖書物語」はそのあとがき[2]にある様に、聖書のいたるところに見られる「伝達不可能の立札」、例えばマリヤが聖霊によって身ごもったというそもそものイエスの誕生に始まる神話、奇蹟に直面して「コップのなかのハエのようにキリキリ舞いをしている、まことにおかしな四十男の姿に、人間の事実的な存在の姿を感じとって」貰いたいという念願が籠められているのであり、その意味ではこの意図がかなり見事に描かれている胸のすくような作品である。椎名は普通の平凡な、それこそ常識人の眼で聖書を読んでゆく、そして至る処で聖書の奇蹟につまづいている。イエスの誕生、山上の垂訓に代表されるその律法、その原罪説、あらゆる種類の奇蹟（海の上を歩く話、五つのパンで五千人、七つのパンで四千人の飢を満たす話）、そしてその復活。以上のすべてに、ごく当り前につまづいて抵抗して、そして全身でそれを否定している。うそだ、嘘だ、信じられない、と。そしてこの聖書否定の一応の結論はこうなっている。多少長くなるが彼の言葉を引用すると、

――ここに人生の舞台へさまざまな俳優が登場する。キリストを先頭にしてだ。それぞれみんなほんとうの何かであるように真[3]

剣に演ずる。全くそれこそ唯一絶対の真実であるがごとくにだ。しかしどんなに巧みにどんなに真剣に演じようと、ほんとうのものへ到達することは出来ないだけでなく、ほんとうのものとその俳優との間にはいつも無限の距離があるのだ。たとえばあなたがジュリエットの役を引き受けているようなものだ。どんなに巧みに真剣に演じようと、あなたがどんなことがあつてもジュリエットであることはできないのと同じなのである。さて、その役を演ずるほんとうのあなたなるものは、どんなあなたなのだろう。きびしいいい方をするならば、そんなあなたは、「いない」のである。舞台から引き下つて、ほんとうの自分へかえり、楽屋でドンブリを食べるようなことは、この人生の舞台にはあり得ないからだ。舞台から引き下つたときが死であるからである。全く聖書こそ、キリスト教会において読むことを禁ずべき最大の書物かも知れないのである。——

椎名のこの、聖書に対する否定振りは或る意味では誠に見事であり、徹底もしている。実は、信仰、或は回心という事実に於てこの種の現実否定はつきものであり、その徹底ぶりや、深さの程度、そしてその絶望が殊更に重要である事は当然でもあるだろう。この引用文に於て椎名は、人生の演劇舞台に登場する俳優の一人に、イエス・キリストを入れている。彼は確実に十字架上で死体となったからである。現実のこの人生を一つの演劇舞台と見做すことはこの人生そのものを「そらごとたわごと、まことあることなし」と断定する事である。然もこの否定の厳しさはこの、そらごとたわごとなりと断定している断定の主である「ほんとうの私」なるものをも更に「いない」のだと否定してる事だ。この徹底振りの見事をさを、彼椎名はどこで学んで来たのであるかと、私などは考えてみたくなる程である。仏教でいう「我」は無いという事にも通うようであり、その説明の仕方は、寧ろ現代人の感覚にとつては、より一層適切で、力あるものの様にさえ感じらる。釈迦の教えでは極めて合理的に我々に「諸行無常」「諸法無我」を説いている様であり、椎名によれば聖書は反抗する事によつて、即ちイエスの十字架上の死を神の子でなく、人間の死と見る事によつて「無我」を感ずるという風に説明づける様である。ここで私は親鸞の思想、浄土真宗の教義をどう

しても連想せざるを得ない。即ち一言にしていうならば、歎異抄十八章のあの文言「よろずのこと、みなもて、そらごとたはごと、実(まこと)あることなし」。真宗に限らずおよそ宗教に於て現実否定という事は甚だ当り前な事柄なのであつて、ここで歎異抄などを引き出すわけあいはないのであるが、彼の回心物語以下を論ずる場合どうしても私には必要であり、実はそのことがこの章でひそかな目的でもある。

さて、然しここはこれ位で一応やめて、彼の回心物語を見てみよう。或る日、頭の禿げかかつた四十男が机に向つていた。いまや彼の生きて行く道はすつかり閉ざれているようだつた。彼はこの人生に絶望の揚句、ただ、一つの残された救いとしてすがりついていた聖書から見事に跳ね出されてしまつていたからだ。そして彼はその時、意識して聖書の一番バカらしく思える個所、つまり復活の個所をより出して、拾い読みしていたのである。そしてルカ伝の復活のくだりを読んだ。そうして、彼は、

——(4)弟子やその仲間へ向つてさかんに毛脛を出したり、懸命に両手を差しのべて見せているイエスを思い描いたのである。ひどく滑稽だつた。だが、次の瞬間、そのイエスを思いうかべていた頭の禿げかかつた男は、どういうわけか何かドキンとした。それと同時に強いショックを受け、自分の足もとがグラグラ揺れるとともに、彼の信じていたこの世のあらゆる絶対性が、餌をもらつたケモノのように急にやさしく見えはじめたのである。——

この一瞬に椎名の見たものが椎名自身を決定してしまつたのであるが、このあとで彼はその複雑な心理過程を説明している。即ち復活のイエスは、また十字架上で死んだのである以上、死体であるというより仕方がない、という事に気付いた事と、然も又この確実に死んでいるイエスが同時にまた、信じられないことだが又、確実に生きているイエスでもあつたという事であつた。

——(5)この生と死が、たがいにおかすことなく同居しながら、たがいにあわれにも唯一絶対のほんとうのものとなることができな

いで、しかつめらしくも支えられているイエスの肉体と骨とに、私はいままで見たことのない人間の真の自由を生々と見たのであつた。そして私は、イエスの「父の約束されたものをあなたがたに贈る」という言葉に、バクチのように自分の存在を賭け、賭けることによつて逆にその必然性をはつきりと知つたようである。——

彼は、復活のイエスに於て、生きているということもほんとうだし、しかし同時に死んでいるということもほんとうだということを見たわけである。このことはいいかえれば、彼のいう如く人間が人間にあたえる絶対性としての「ほんとう」が、ここではきびしく拒否されていると見た訳である。椎名はこれまで現実そのものを否定して来た。人間の持ち得る自由もそして愛も。そして更に聖書にかかれたものへのつまづきに於て、それらのものを「ほんとうのもの」とする事が出来なかつたのであつた。そしてそれらを「うそ」のものとする根底には「死」というものに絶対性を持たせ、「死」だけは「うそ」ではないほんとうのものとして来たからなのであつた。そしてそれは本来的な人間の精神の働きによるのだと彼はいうのである。「生」と「死」の様な矛盾対立する二つのものの一つを自分が選んだとき、それはあくまで自分自身が選んだのであり、この私自身が、自分の判断によつて決定したという決定の主人がこの「私」であるという様な位置に、この私が立つてしまう。この決定は更に否定されなくてはならないものであつた。「ほんもの」だとしていた「死」すらも絶対のものではないと、きびしく拒否されたことを見た時、椎名の回心が成立した様である。だから彼はいう、

——(6)神を信じようとしているかぎり神よりも自分の方がえらくなり、より神様になつている。だから神を直接信じようとするかぎり、神と自分との間にはいつも無限の距離があつて、永久に信じられないだけでなく、しまいにはその無限の距離そのものが神のように見えて来る仕儀となつてしまうのである。——

まこと、信仰、回心の機微を語る言葉というべきである。そして然も現実に於ける絶対矛盾的なものを、相方共に

生かすというやり方によつてそれがなされたという椎名の体験上の主観的真実の上にそれは立つているのであつた。椎名に於ける最後の拠り所ともいうべき「死だけはほんとうのものだ」という信念がここに厳しく、そして素晴らしくも否定されたのである。現実は、くつきり、まるごと否定された。この私もろ共に、そして、エセ信仰、我々が常に陥入り勝ちな信仰上の陥穽すらも否定され、それが更に人間性の回復という形で生かされる事になつたのである。

ここまで説明して来た時、人々は私の口調がどうやら浄土真宗的なにおいを持ちはじめた事に気付かれたであろう。事実私は椎名の「私の聖書物語」を読みながら、思いは常にそこに往つていたのである。ここまで来て私は、何のことはない、これは浄土真宗のキリスト版ではないかと思つた。神を信じるこの自力そのものをさえ否定しようとする口吻など殊に至妙であるという風に。ここで私はこの論述をわき途にそらす様ではあるが、前述の歎異抄の一節をふたたび引きたい。

――よろづのこと、みなもて、そらごとたはごと、実(まこと)あることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします。――(7)

椎名のこの素朴な信仰体験に、一見はみ出て見えるところが最後の「ただ念仏のみぞまことにおはします」の一言である。椎名をしばらく、かたえに置いて私にはこの念仏だけがうそでなくまことだという事を考えてみたい。ここの意味は現在の私にとつてはどうしても「そらごとたわごと」と対立した「真実の念仏」とは受けとれない。「そらごとたわごと」に対立する念仏ならば、その念仏も又「そらごとたわごと」にしかすぎぬのではないか。だからここはどうしても、林田茂雄氏の歎異抄批判(8)に私は共鳴する。即ち、「そらごとたわごと」の中にくまもなく遍満して、それらを生かしているものが念仏だということ。そらごとたわごとを外にして真理はあり得ず、そらごとたわごとのままが真理そのもののあらわれであると感得することが、「念仏者は無碍(むげ)の一道」であるという絶対自由の世界の在り方を意味することではあるまいか。それは又、誠にありふれた説明を用いる様で恐縮であるが、水と波との説明をここ

に引かして戴きたい。真理という水は、波という形をとつてこの現実に存在している。我々にとつては、この波そのものが水なのである。この現実のままが真理そのものであると感得することより外の真実はあり得ないのである。実に、波をはなれて水がないが如く、このそらごとたわごとたる現実をそとにして、又真理はあり得ないからである。

椎名の信仰をあとづけて来て私は、最後に彼の文学に於ける最も重要なものの一つである「ユーモア」の意味をここで見きわめて置きたい。彼は、あの復活したイエスが、自身が生きているという事実を信じさせようとして、弟子達の前で真剣な顔で焼魚をムシャ、ムシャ食べて見せている姿を実に滑稽だと言つている。そこに、そしてそのイエスに、イエスの深い愛を感ずると同時に、神のユーモアを感ぜずにはおられなかつたと述べて居り、更に又、同書に於て、彼が二、三年前（昭二八・九年頃か）から、ユーモアという言葉を口にしているし、彼の小説が奇妙なユーモアをもつているといわれる場合も少なくないが、ユーモアという言葉は本来的にキリストにおいてしか成立しないと思うのであり、そして彼の小説にも奇妙なユーモアというものがあるならば、おそらくそれは彼自身の信仰から自然に流れ出して来るものであると、彼は述べているが、この意味は、前述の彼の信仰体験から自然に理解されるところであろう。即ち、ナンセンスにして、ナンセンスのままが絶対となつたもの、否定し、棄て去るべきこの現実の外には又絶対真実そのものもあり得ないという事から生ずるもの、それは信憑すべきでない現実が又真実以外の何物でもないと知つた時の、困惑と哀感と安心と、緊張感からのゆるみ、そしてそれは矢張り滑稽そのものではないか。この感情が椎名にとつてユーモア、そして神のユーモア、と呼ぶところのものであつたのである。最も汚穢にまみれ、最も矛盾に富んだバイブルは寸毫のくるいもなく、又この人生の現実そのものの正体の記録であり、最も否定さるべき復活が又最も厳粛にこの事を決定づけるものであろうとは。椎名の回心の世界からみて何ともユーモラスにそれがうつるのである。厳粛にして、何と又、それは恐怖にみちた事柄である事か。恐怖でありながらほんとうには又恐怖で

ないこと、それが恐怖におけるユーモアの構造だと彼は述べている。

ともあれ、椎名の聖書観の中心をなすイエスに於ける生と死に対する絶対矛盾、及び相方に対する全的否定を通じてなされる全的肯定は著しく他力信仰の、そして信仰の契機やその内容に酷似している事に気付かせられる。当然これは又浄土真宗にいう二種深信[9]のそれにも通うものがあるであろう。つまりは宗教的体験上の危機とその克服という事情の中にひろく相通ずるものでもある。機の深信は法の深信に相対立するものでなく、人生の危機に立ちながら生の戦慄に在りながら法悦を内包し、法悦が同時に又危機感を充実してゆく。椎名には椎名の了解の仕方があつたであろうが、例えば彼の文学に底深く流れているあの危機感と、そこにただよう不思議の戦慄と、そのよろこび、そしてその微笑のただよいとは、例えばそれが彼の初期に属する作品に於けるものであつても、彼の宗教的心情よりする解釈の仕方より外に私は、より適当な方法を持ち合わし得ないのである。

最後に一言つけ加えさせて貰うならば、何等既成的な知識に頼らず、自ら体当りして聖書を読み、その中から永遠の生命を汲み出した彼。一種不思議な、誠に独自な人間物語の教々を書いた椎名は、尊敬に値する作家の一人である。然し私は勿論のことながら彼の価値を、小説家としての椎名麟三に置いているのであって、彼のキリスト信仰には置いていない。例えば私は、小説「美しい女」の独自性とその芸術性を高く評価するものだ。そして私は、前述の如く彼の信仰に対して、私にとつて最上の椎名批判というつもりで、これに親鸞の思想を対比させて来た。又、宗教は学問でも哲学そのものでもない、実に体験の世界であり、実践の上に生かさるべきものである以上、彼の回心の事実は私に限りなき尊敬の心をはらわせる。然しながら、椎名がバイブルに体当りしたが如く、親鸞も又、大蔵経に体当りして、浄土の三部経を選びとりそこに独創的な思想を発展させて浄土真宗を樹立したのである。どちらに従うかはまさに各人の自由であろう。椎名氏自身はそれで結構だ。だが然し私自身は彼のあとについて行こうとはゆめ

さら思わないといいのも正直な私の気持である。

二、「永遠なる序章」その他

――彼は手をとり出して眺めた。くだらない手だつた。彼は、その自分へ微笑を感じた。しかもこの足を引きずりながら歩いている自分。この自分さえも、自分の自由な喜びをもつて創りあげているものではないか。粘土をこねて自由につくり出しているようなこの古里安志。そしてこの自由こそ永遠なものから与えられている喜びではないか。日々この地上の時間のなかへ、そして世界と歴史のなかへ、かたく杭のようにしつかりと打ち込んで行けるのは、このような自由に於てではないのか。だからおれは、おれ自身の苦しみは勿論、おれの幸福やおれの女に対する愛よりも大きいのだ。おれはこの時間にしばられた自分へ、いろいろな挫折に於て出合う。そして、その出合いのなかに、苦しみ喘ぎながらも実にこんなに自由な喜びが感じられるのはそのせいなのだ。（頁・二〇九）――

昭和二七年雑誌「群像」に発表された「邂逅」の一節である。「粘土をこねて……」という個所は、前章に於て、この人生を舞台に、そして人間をさまざまな俳優だと形容した時の俳優の一人たる自分という意味であり、ここに「永遠なものから与えられている喜び」というのは、この時間にしばられた、限界を有する自分という存在も「私の聖書物語」によれば「人間に限界あることがたとえば愛に限界のあることがマスが水の量を保証するように、愛の十分さを保証してくれる」（頁・一四二）から、キリストによつてその十分さを喜ぶことができるという、その喜びを意味している。したつがて「おれは」というおれも、キリストに於て自由ならしめられた「おれ」の意味にほかならない。

――しかし、このおやじの死さえも、おやじにとつて絶対的なものだと誰もきめることは出来ないのだ。すると、彼の胸にかすかなゆるめが感じられた。（頁二一三）――

この文章、ことに「ゆるめ」の意味など、神のユーモアに意味されるものを理解する事なくしては解釈不能ではあ

るまいか。

――安志は、みんなの後れているのに気がついて立止った。確次、実子、けい子、岩男の四人は、往来の人々にいりまじりながら、めいめい遠くはなればなれになつておたがいにひとりでいるように歩いていた。安志は、強い愛の衝動を感じながらひとりひとりの顔を見た。みんなそれぞれ妙な顔をしていた。そして妙な一行だつた。

安志は、その四人の仲間を見ながら、このおれと彼等との溝は絶対的なものではないと思つた。それはかえることが出来るのだ。彼は微笑しながら、だまつて近付いて来る四人を待つていた。（頁二三一）――

この風景は、ありふれたものの如くであり乍ら何か心に泌みる。たとえば、ここに、或る域に到達し得た作者、椎名の人生観を象徴しているかの如く思える。四人ばらばらというのは近代社会人の孤独性を指すだろう。彼等との溝が絶対的なものではない、というのはむろん、キリストから与えられた人間性回復の上に立つ微笑である、とまで堀り下げて解したいところである。「邂逅」の題名の意味は、それでは何であろうか。それは限界を有するこの人間達の出合う挫折を意味し、然もこの挫折を通して得られる人間性充実のよろこびの「邂逅」の意味ではないか。マタイ伝の、そして椎名が「現代日本文学全集」（筑摩版）の扉に書いた「一日の苦労はその日一日だけで十分である」という言葉、つまり現実の挫折は挫折として、十分に生き切るという意味がこの作品の基調となつている事は間違いあるまい。「私の聖書物語」によれば、彼の回心の事件は、昭和二六年の洗礼後、二、三ヶ月の事と推定される。「永遠なる序章」と「邂逅」との間に作品の質的変化が感じられるのもその為である。

「永遠なる序章」はかなり難解な作品であると、本多秋五氏はその新潮文庫本の解説で述べているが、私もそう思う。「深夜の酒宴」が発表されたのが昭和二二年で「永遠なる序章」はそれより一年後に書かれている。量質共に椎名の代表作たるに恥じないものであり、二七年の「邂逅」への飛躍・発展の土台として一応完成している。（本多氏

はこの両作の質的差違は認めず、椎名の新しい段階は「自由の彼方で」以後とみている。）私は前述の如く「邂逅」は椎名の回心以後ものされたもので、そのキリスト教信仰に色濃く裏打ちされた作品であるのに対し「永遠なる序章」は、いはばキリスト教につまずきつつものされたものという意味での、その原型ということにしか理解されず、したがつて、「永遠なる序章」がいかに「深夜の酒宴」より大胆に飛躍していようとも、共に敗戦直後の人間荒廃の空気の中で激しく激情してものされた同質の作品であつて「邂逅」はそれ等より大きく脱皮していると考えられる。

それでは「永遠なる序章」のテーマは何か、と言えば、一言にしてこれは「人間革命」の意味を追求する思想小説であると言える。主人公砂川安太（あんた）という労働者が戦争で片足を失つて義足をつけいる上に身寄りもなく肺結核のうえに心臓まで悪く、治療の見込みなしと死の断定を下されたところから始まる、六日間の出来事を扱つた物語である。六日間で終る、安太の生活を、一日一日精一杯に生きようとする生の激情で充たそうとするのがその意図の様である。この作品には、「生の激情」の他に「重さ」「自由」「革命」「醜悪への志向」という様な晦渋な観念がひしめき合つていて、更に難解さを加えてはいるが、椎名という作家は瀬沼茂樹氏も指摘している如く、告白体風の表現をとる作家で、割合冗舌に語り聞かせる性質があり、今挙げた観念語も、作中、繰りかへし繰りかえし、作者自らが説明を加えている。読者は素直にその跡づけをしてゆけば、作者自らの言葉でなされるこれら諸観念の詳細な解説を手にする事が出来る。これらを素材にしてそれ等を具合良く結び合わせてゆけば、「永遠なる序章」の作品構造は恐らくは次の如くなるであろう。現実の人生は全くの無意味である。実人生とは、この無意味なる人生からもたらされる苦しみやその重みに耐える事以外の何物でもない。然しこの苦しみや恐怖やらが、生なるものを実感させ、そこに新鮮な感動を呼ぶ、即ちここに生の激情が起る。「一切は無意味だ。これよりたしかな真理はない。それにもかかわらず自分は生きている。それは全く素晴らしいではないか」（頁七一）である。それは更に自由を願わせ、更に人を

人間革命の激情へまで押しやる。

――[12]無意味を意味にかえるものはまさにこの激情のなかにあるのだ。全く生きているということは人間の最もはげしい激情である。その故にこそ生きているということそれ自身が既に革命であるのだ。そしてまた生活することそれ自身が既に革命であるのだ（頁一一八）――

然しこの様な革命の意味はただこれだけでは説得力稀薄であろう。椎名が「現代青年論」（頁二九）で述べている様に、この世に存在する、そして大人達が現実として所有している、相対的な自由の外に、青年達が持とうとする主体的な絶対的な自由というものがあるのであつて、それ等は無関係のまま放置されてはならず、愛をもつて、この対立や痙攣から、ゆるめてやる様な真の意味のユーモアが必要で、大人の自由を生かし得ると同時に、青年たちの自由を生かし得るものを見出してやる事が目下の急務なのであろう。そしてこれが現実となつた時、椎名のいう真の意味の人間革命が行われるのであり、キリストに於てそれが為され得るというのが椎名の本音ではないだろうか。

終りに「永遠なる序章」の題名の意味を考えてみよう。

――しかし、一体、何をはじめるのか。それはほかの何ものかである筈があろう。この生活をはじめるのだ。今日一日の生活をはじめるのだ。そして人類は、長い歴史を通じてそうして来たのではなかつたか。瞬間、瞬間にはじめ、一日、一日にはじめ、永遠にはじめているのではなかつたか。（頁一〇一）――

生の激情の哲学であり、人間革命の宣言である。主人公安太（あんた）は自己の分身とも言うべき銀次郎の死体に向つてこう叫ぶ、

――どうして、あなたはくだらない人である筈があろう。あなたは一つの立派な永遠なる序章だ。それは、はじまつた刹那に終つたとしても、あなたはそれだけで十分生きたのだ。少くとも僕は決してあなたへの尊敬を失いはしないだろう。というのは、

現在僕が生きているのは、何故かあなたがいたおかげだという気がするのだ。先刻はあなたへさようならを言つた。しかし今度もさようならを言う。さようなら。深い尊敬をこめて！（頁一八六）――

再びルカ伝の「一日の苦労はその日一日だけで充分である」と言う言葉がい思浮ぶが、ここではまだ充足の意味はない。充足を求める叫びがあるだけである。この作品の雰囲気はドストイフエスキーにもつとも近い、と本多氏は言う。それならば私も言わう。椎名は二十八才の時、ドストイエフスキーの「悪霊」を読んで強いショックを受け、このことによつて彼の文学開眼が行われたらしく、「ドストイエフスキーと私」という一文の中で、

――それは私に、たとえ人生に解決がなくても、助けてくれえ！と叫ぶことはできるということを教えてくれたのであつた。[12]

と述べ、更に「そして私は、いつまでも文学の本質は、この叫び声だと思つているのである」と付け加えているが「永遠なる序章」は実にこの叫びを端的に生かした、具体化した作品であると。その意味でこれは一応の完成をみている。私がこれを初期作品中の代表作とみるのもその意味に於てである。

だが、この作品の難解さは、その作品構造や、思想観念にのみあるのではなくて、例えば、安太が何故死を宣告されながら激情的に生きようとするか、つまり生の激情の意味は何かが、一応の説明はありながらなお充分の説得力を持つて書かれているとはいえず、つまり思想が充分表現し得られていないといううらみがある。私が、「邂逅」や更には「美しい女」を完成された作品と見、彼の作品中での佳作と呼ぶのも勿論この観点からである。

むすび

椎名麟三は、明治四四年兵庫県の一寒村に生れ、常識外れの貧困と逆境の中で生い立ち、十五才にして家出して、

身体一つを元手に、出前持ち、見習コックなどの職を転々し、その間独学で専門学校入学資格試験検定に合格などの事があつたが、十七才の時宇沿川電鉄に入社、間もなく労働運動に投じ、日本共産党宇沿川電細胞のキャップとなつたが、二十才、東京で逮捕され、懲役四年の判決を受けたが、控訴、転向の結果、二十二才で未決を出たが、獄中、ニーチェなどの哲学書を耽読した。ドストイエフスキーの影響を受けて、二十七・八才頃から文学への関心を深め、長い習作時代を経て、三十六才「深夜の酒宴」で文壇的にデビューした。人間苦悩の追求の深さとそのはげしさは、戦後荒廃した人々の心に深い感銘を与え、晦渋であつても重厚なその独創的表現スタイルも又新鮮にして甚だ力強いものがあった。四十才にしてキリスト教の洗礼を受け、後いくばくもなく、洗礼とは無関係の様な心的状態下に回心を体験し、彼のユニークな文学を樹立した。貧困、共産主義、服役、ニーチェ哲学、ドストイエフスキー、キリスト教、そして文学。こう並べたけだで誠に特異な作家と言うべきである。人生わけ知りの彼、世の荒波にもまれつづけて来た忍耐と抵抗力の人並はずれて大きい彼は、又エッセイストとしても小説に劣らぬ魅力を持つ。近時、テレビや更には演出家としても高くかわれて来ている様である。

それでは、小説家としての彼の今後はどうか。自己告白的要素を多分に持つ彼ではあるが、私はむしろ彼の自伝もの多くの価値を置く事の出来ない者である。「美しい女」にして彼は一つの壁に突き当つているのではないか。実はこの様な本格小説こそが彼の腕の見せ所なのであつて「美しい女」の発展線上に文学的な彼の運命が置かれているという事は確かであると私には思える。或は「深夜の酒宴」と「邂逅」とを綜合的に集大成すること、つまりはこの二作を処女作として、これに向つて成熟すること、平凡ながらこれが椎名文学のふるさとであり、その進むべき文学上の唯一の道であろうと私は思う。

（昭・三六・一・二〇）

註

(1) 中央公論社版「私の聖書物語」（昭・三四・八・三〇）
(2) 同書、頁二〇九。
(3) 同書、頁八三。
(4) 同書、頁一〇五。
(5) 同書、頁一〇七。
(6) 同書、頁一一九。
(7) 歎異抄新註（多屋頼俊著、頁一五七）。
(8) 歎異鈔の問題点（林田茂雄著、大法輪閣版）、頁二一一
(9) 二種深信については、相愛研究論集前号（第七巻第一号）に於て岡邦俊教授の「二種深信に表現された宗教の本質」に詳しい論考がある。
(10) 大日本雄弁会講談社版（昭三〇・九・二五）。以下「邂逅」本文よりの引用・頁数は同書による。
(11) 現代教養文庫本「近代日本の文学」（昭三四・一〇「椎名麟三」）。
(12) 新潮文庫本、五一B、以下「永遠なる序章」（昭三二・八）本文よりの引用頁数は同書による。
(13) 「愛と自由の肖像」（現代教養文庫本、昭三四・二）頁八四。

（本学講師　国文学）